

花き

実況

1 キク

奥越の秋植え夏ギクの7月16日の調査（昨年7月13日）では、「シューペガス」で草丈128.7cm、葉数76.0枚、蕾径8.0mm、「小紫」で草丈106.2cm、葉数47.0枚、蕾径4.7mm、「小鈴」では草丈98.7cm（昨年72cm）、葉数51.0枚、蕾径4.0mmであった。

病害虫として、ダニ類が少発生、一部品種・圃場でべと病が多発している。

春植え夏秋ギクの7月16日の調査では、「シューペガス」で草丈83.5cm、葉数51.3枚、蕾径4.7mm、「小紫」では草丈86.8cm、葉数42.3枚、蕾径6.7mm、「小鈴」で草丈90.7cm、葉数49.7枚、蕾径5.0mmであった。

病害虫として、ハダニ類が少発生、アザミウマ類の被害が少～中発生している。一部圃場・品種でカスミカメムシ類の被害が発生中である。また一部品種・圃場でべと病が多発している。

今年で14回目を数えるJAテラル越前キク部会品評会は7月19日に審査が行われ、大野市内のショッピングタウンで展示が行われた（写真1）。



写真1 JAテラル越前キク品評会

あわら平坦地の春植えキクは6月下旬から出荷が始まっている。例年より早い。病害虫として、アザミウマ類が少発生している。

福井市の春植え夏秋ギクは、福井市二日市の7月16日の調査（昨年7月17日）では、「小鈴」で草丈80～90cm（昨年草丈58cm、蕾径7mm）で、膜切れ期から開花始めである。「花絵」では草丈100cmで発蕾期、「小雨」では草丈70～80cmで発蕾から出蕾、「西の星」では草丈80～90cmで出蕾期である。

病害虫は特に発生していない。

福井市東郷では、エスレルを5月17日から2回散布した。7月18日の調査で、「小雨」で草丈90～100cmで出蕾、「西の星」で草丈90～100cmで出蕾、「小鈴」で草丈90～100cm（昨年：草丈70cm）で出蕾である。

病害虫として、白さび病が少発生、オオタバコガが微発生している。

福井市下筋生田町では4月中旬に定植が行われた。7月18日の調査で、「小雨」で草丈80cm、7月10日過ぎから出荷が始まっている。「恋ごころ」では草丈70～80cmで咲き始めている。「小鈴」では草丈80cmで出蕾（昨年：草丈74cm、蕾径5mm）であり、生育後半の肥切れのため葉色が薄くなっている。

病害虫として、アザミウマ類が少発生している。

7月18日には福井花卉出荷組合で圃場巡回および研修会が行われた（写真2）。



写真2 福井花卉出荷組合 巡回

丹生の春植え夏秋ギクは、7月16日（昨年7月17日）の調査で、「小鈴」では草丈81 cm、蕾径5 mm（昨年：草丈88 cm、蕾径8 mm）で、生育にばらつきがあるが、草丈・蕾ともに伸長し、収穫間近である。「翁丸」は草丈92 cm、蕾径7 mm（昨年：草丈78 cm、蕾径9 mm）で、黄色い花卉が一部見え、収穫間近である。「花絵」は草丈104 cm、蕾径3 mm（昨年：草丈94 cm、蕾径3 mm）であった。

病害虫として、白さび病が少発生している。またアザミウマ類の食害が少発生している。

越前市の7月16日の調査（昨年7月17日）で、「はじめ」で草丈107 cm、蕾径3.3 mm（昨年：草丈81 cm、蕾径4 mm）、「秀光」では草丈116 cm、蕾径4.7 mm（昨年：草丈93 cm、蕾径4 mm）、「恋心」では草丈96 cm、蕾径5.0 mm（昨年：草丈97 cm、蕾径4 mm）であった。

二州の春植え夏秋ギクは7月16日（昨年7月12日）の調査で、「小鈴」で草丈95 cm、蕾径6.0 mm（昨年：草丈95 cm、蕾径6 mm）、「翁丸」で草丈75 cm、蕾径6.5 mm（昨年：草丈80 cm、蕾径6 mm）、「恋心」で草丈80 cm、蕾径9.5 mmであった。開花は前年並みかやや早めの見込みである。

病害虫は一部圃場で白さび病が甚発生している。また一部品種でハダニ類が甚発生している。アザミウマ類の被害は認められなかった。

春植え9月咲き小ギクの草丈は、「わかさ」で草丈50 cm（昨年55 cm）、「映虹」で55 cm（昨年60 cm）、「おりがみ」で草丈70 cm（昨年60 cm）であり、昨年に比べ生育はやや遅めである。

病害虫として、一部品種で芯とびが少発生、カスミカメムシ類の被害が少発生している。またネキリムシ類による欠株が多発している。

春植え10月咲きキクは、「はくろ」、「お吉」、「ふるさと」でそれぞれ草丈が10 cmに生育している。

病害虫は特に発生していない。

若狭の春植え夏秋ギクは、7月12日の調査では、「くれない」で草丈89 cm、蕾径4.3 mm（昨年：草丈75.8 cm、蕾径7.6 mm）、「翁丸」で草丈101.6 cm、蕾径4.8 mm（昨年：草丈79.8 cm、蕾径6.8 mm）、「しらかば」で草丈98.2 cm、蕾径5.5 mm（昨年：草丈76 cm、一部立弁）で、昨年より草丈は長い。

病害虫として、カメムシ類が中発生、一部品種で黒斑病の発生がみられる。

露地の9月咲きキクは5月20日頃定植され、7月12日の調査（昨年7月17日）では「初秋」では草丈42.2 cm（昨年46.8 cm）、「大信」で草丈46.2 cm（昨年49 cm）、「おりがみ」で草丈62.4 cm（昨年53.8 cm）で、草丈のばらつきが見られる。

病害虫は特に確認されていない。

施設の10、11月咲きギク「ようせい」「白馬」「おりづる」等の品種が6月13日からハウス内に定植された。電照栽培では、同一品種を7月中旬に定植した。

寒ギクは「冬一番」「寒桜」「新年の美」等の品種が7月3～4日に定植された。

2 スイセン

促成栽培の高温処理が6月18日（1回目）と6月25日（2回目）から開始され、その後エチレン処理（1回目：7月2日から、2回目7月9日から）実施された。小樟地区の養成球根圃場において、6月26日から掘り取りが行われ、乾燥、選別が開始された（写真3）。

7月7日に梨子ヶ平の圃場において、水仙ボランティアによる球根の掘り取り、改植が実施された。



写真3 球根選別の様子

3 ユリ

あわら丘陵地のシンテッポウユリは、季咲7～9月出荷栽培で、4月上旬に露地に定植された「オーガスタ」（7月中下旬出荷用）は草丈60～70cmで発蕾中である。8月旧盆出荷用の「オーガスタ」、「雷山3号」は抽苔し、草丈が20～30cm。9月出荷用の「オーガスタ」、「雷山3号」では本葉が6～10枚程度。固定種である「雷山3号」はばらつきが目立つ。

病害虫は特に発生していない（7月14日調査）。

4 トルコギキョウ

あわら丘陵地の抑制二度切り栽培のレイナ系、ロベラ系、ファルダ系他の品種では、越冬した後の2番花の草丈は80～90cmであり、6月下旬から出荷された。

病害虫として、アザミウマ類が部分的に少発生、立枯病が少～中発生している。

今年度の抑制二度切り栽培は8月上旬の定植に向けて圃場を準備している。

2月定植・新盆出荷型の作型では、ロジーナ系の品種が7月3日頃から出荷が始まった。草丈は80cm以上で、開花輪数は6～8輪あり、ボリュームがあって品質は良好である。

病害虫として、アザミウマ類は少発生している。

4月定植・旧盆出荷型栽培では、ファイナル系、PFソロ系の品種が4月下旬に圃場に定植された。ノーピンチ（無摘心）の個体で草丈30～40cmで天花が見え始めた。

病害虫は特に確認されていない。

越前市の7月16日の調査（昨年7月17日）では、盆出荷用品種で4割程度、収穫が始まっている。草丈は116cm程度である。

病害虫は特に発生していない。

二州では、草丈が85～100cmに生育し、一部品種で7月中旬から直売所での販売が開始された。

病害虫として、一部品種にチップバーンや茎折れが少発生している。また一部の圃場では、灰色かび病が少発生している。

若狭では、4月5～10日に定植された品種では、草丈は73～80cm、一番花が開花中である。6月10日に定植された品種では、草丈は9～13cmに生育している。

病害虫は特に発生していない。

5 その他

あわら市のアスターはステラ系、あずみ系が栽培されている。ステラ系品種で、電照栽培の個体（写真4）が6月10日～25日に出荷が終了した。

旧盆出荷型の栽培では、4月下旬に定植され、7月14日の調査では草丈15～30cm程度、ばらつきが大きく発蕾はまだである。

9月彼岸出荷型の栽培では、電照抑制用の苗を育苗している。病害虫として、さび病とカルシウム欠乏症が部分的に少発生している。



写真4 アスターの電照栽培

あわら市のストックは、試作のアーリーアイアン系（ホワイト、マリン、ピンク）は8月旧盆過ぎから移植栽培として定植が予定されている。直播栽培では8月旧盆過ぎから開始予定。アイアン系は9月から直播を予定している。アーリーアイアン系は11～12月の出荷、アイアン系は12月以降の出荷を予定している。

対策

1 夏期の灌水・高温管理

- 1) 本年は、5月が高温少雨、6月から7月が低温気味であった。5月の高温少雨により根の伸長が抑制されて肥効が悪く、カルシウム欠乏を起こした品種も見受けられた。根の生育が悪かったため、今後の大雨と高温によって根腐れを起こす可能性もあるため、排水対策を万全にするとともに、根腐れを起こした株は速やかに除去し、殺菌剤の散布を行う。また高温による開花遅延を軽減するため、夕方から夜間の畝間灌水を行い、夜温を下げる必要がある。
- 2) キクでは生育後半に、上部の葉が小さくなるうらごけ（末殺）症状や、新葉がやけるカルシウム欠乏が出る株も見られる。晴天時の黒マルチ内温度は45℃以上になるため、欠乏症がでやすくなる。マルチの一部を切って、穴をあけ、水を灌注する。灌水後の日中は排水溝に水が溜らないように、通路の再整備や溝を掘る等の排水対策を行い、根を健全に維持し、新根の発生を促すようにする。
- 3) 施設は日中、高温になるので、天窓、妻窓、裾窓を開放し、通風を良くする。また、換気扇、送風機等を設置して、ハウス内の空気を循環させるようにする。

2 秋植え夏ギクの苗づくり

- 1) 親株として用いる株は病害虫に侵されていない株とする。とくに、キクスタントウィロイド、キクモンサビダニ（紋々病）、白さび病の発生兆候がある場合は適宜防除する。被害が大きかった品種は更新する。
黒さび病の発生がみられた地域では、ステンレス剤の予防散布を励行する。親株床の面積が少ない場合はトンネル被覆等で病菌を死滅させる。しかし、高温時（30℃以上）の散布は葉害のおそれがあるので避ける。
- 2) 親株として用いる株は、採花前後も灌水、施肥、除草、防除管理を適宜行う。

- 3) 台刈り前には十分灌水を行い、1 m²当たりそさい3号で30g程度を施す。
- 4) 8月中下旬を目安に、親株を地上5 cm程度の高さで刈り込み、土寄せをする。

3 中輪キクのやなぎ芽の発生と処理

- 1) 9月咲ギクや秋ギクでは、7月下旬から8月上中旬に曇天、降雨などが続いた場合に発生する。定植時期が早い作型では発生しやすい。
- 2) 電照栽培では、停電などで3日間以上電照がストップした時や、電照期間が60日以上と長すぎた場合に発生が多くなる。
- 3) やなぎ芽の発生初期に1番上のわき芽だけを残し、不完全な蕾と他のわき芽を取り除く。なるべく早めに処置を行うことで、草姿がよくなる場合がある。

4 夏期の病害虫防除

夏期の農薬散布は、早朝か夕方の涼しくなってから実施する。また、農薬を複数の剤を混用した場合や、植物体がしおれた状態では薬害がでやすいので注意する。夕方の防除であっても、噴霧直後は熱水が出やすいため、ゴム手袋越しに温度を確認して防除を行う。前の薬剤がホース内に残っている場合があるため、最初の薬液は周辺の雑草等に試しかけを行う。薬害が出やすい農薬は薬剤履歴をよく確認して高温時の使用に注意する。

1) ハダニ類

乾燥下で多発する。薬剤は、抵抗性の発達を避けるため、系統の異なるハダニ剤を使用する。圃場の周辺の除草を行うことで隠れ場所をなくすことも重要である。特に7~8月は除草に手が回らないことが多いので注意する。

防除時は葉裏に薬液がかかるよう、噴口を斜め上向きとして防除を行う。最下部はかかりにくいので、防除前に除葉する。キクのハダニ類薬剤は、アグリメック、スターナイトフロアブル、ダニトロンフロアブル、コテツフロアブル、ダニサラバフロアブルなどを散布する。多発時は必ず殺卵力のあるバロックフロアブル等の殺虫剤を用い、発生数を減らして、殺ダニ剤を利用すると効果がある。同一系統の薬剤の連続および近接散布は行わない。

2) アザミウマ類

乾燥下で多発する。破蕾後の蕾の中にアザミウマ類が入った場合、防除は著しく困難になるので、破蕾期前に薬剤散布を徹底する。薄暮時の散布効果が高い。付近の雑草や切り残し花が第一次発生源となるので除去する。

キクを加害するアザミウマ類はミカンキイロ、ミナミキイロ、ヒラズハナ、クロゲハナなど各種があるので、種を確認した上で、薬剤を選定する。ミカンキイロアザミウマ等は、キクえそ病を媒介するので特に注意する。

ミカンキイロアザミウマには、アフーム乳剤、カスケード乳剤などを散布する。それ以外の種にはハチハチ乳剤、プリンスフロアブル等を散布する。

3) アブラムシ類

夏は一時的に数が減少するが、秋には再び繁殖する。葉裏で越冬する個体もみられる。時々葉裏をチェックする。

同一薬剤を連用すると抵抗性がつき、効かなくなるので、系統の違う薬剤を計画的に使用する。とくにワタアブラムシは一生のサイクルが短く抵抗性がつきやすい。圃場の周辺から侵入するので、よく観察し、初期に駆除する。種類によっては、生長点付近のみ発生するもの、葉裏を主体とするものがあるため、同一方向での噴口

の防除は避ける。薬剤として、ウララ 50DF、アーデント水和剤などが挙げられる。

5 スイセンの管理

- 1) 促成スイセンでは定植前から遮光ネット等を設置し、地温の低下を図り、発根と発芽を促すためスプリンクラーや灌水チューブなどによる散水を行い、地温・気温を極力低下させる。畝間灌水の場合は発根部位（球根の根盤部）まで水が回るようにし、回ったらすぐ排水に心がけ、停滞水がないようにする。
- 2) 季咲スイセンは、9月以降、乾燥した場合は、葉の長さを確保するため、用水が確保できる圃場では灌水を積極的に実施する。

6 ストックの育苗と初期管理

- 1) 播種後の管理は雨よけハウス等で行う。ハウスで管理する場合は、高温対策のためにハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げる。育苗箱はベンチ等の上で風通しを良くし、灌水は地温の低い早朝に行う。
- 2) 八重鑑別後、葉色が薄い場合は、OKF-1などの液肥を施用する。育苗日数 20 日程度の若苗定植を心がける。
- 3) 本圃は、クロールピクリンやガスタード微粒剤で土壤消毒する。
- 4) 本圃は、定植 5 日前からハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げておく。2~3 回に分けて十分に灌水して畝全体の水の通りをよくしておく。
- 5) マルチを張る場合は土壤水分が十分にあるときに、土面と隙間がないよう密着するように張る。隙間があると風であおられるばかりでなく、地温が高くなる。
- 6) 定植後は直ちに灌水し、液肥を施用し、活着を促す。
- 7) 直播栽培では、立枯れ性の病害を予防するために有機質肥料の施肥は早めに行い、栽培床に十分灌水しておく。また、播種時の地表面の温度を極力下げるため、播種の 5 日程度前から 70~80%の遮光資材をハウスの屋根にかけて、風通しを良くして地温の低下に努める。播種後は土を乾かさないように灌水し、発芽後は苗の徒長防止のため、直ちに遮光資材を取り除き、灌水は土の表面が乾いたら行う。
- 8) 立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を調べる。立枯病（リゾクトニア菌）では、発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、ピシウム菌の場合は、引っ張ってもちぎれずに根がついてくる。立枯病（リゾクトニア菌）が発生した場合はリゾレックス水和剤を土壤灌注し、ピシウム菌が発生した場合はリドミル粒剤 2 を土壤表面散布する。

7 ハボタンの定植と初期管理

- 1) 切り花ハボタンは草丈を確保し、細く作り上げる必要がある。施設栽培の場合は、前作の肥料が残っている場合があるので、土壤分析を行ってから栽培する。露地栽培の場合は、基肥として石灰質肥料 10~20 kg/a、窒素、リン酸、カリを成分で各 1kg/a 施用する。
- 2) 本葉が 2 枚の若苗の時期に、12 cm 角ネットを使用し、1 マスに 1 株植えつける。苗が老化する前に直ちに定植する。
- 3) 定植後、活着するまではしっかりと灌水をする。活着後は、土の表面が乾いたら灌水をし、草丈確保のため、乾燥しすぎないように注意する。

AMeDAS のデータ



